

八十島義之助・花岡利幸 著

交通計画

交通計画という分野は 10 年くらいの浅い歴史を持つ新しいものである。しかし、世界の主要都市が直面している一つの問題は、まさしくこの交通計画にほかならないものである。いままでは、他の分野に属していたのであったが、しかし、いまや、総合的交通体系の必要性が多く叫ばれるのに伴い、適確な交通需要予測が最も必要とされている時期である。

交通計画にたずさわらない分野の土木技術者は、「交通計画」という言葉を聞いたときの内容を少し見ただけで「むづかしい分野」とであると感覚的に受けとめる傾向がある。たしかに交通計画は高度な知的技術を要するものであるが、これからの世界にとっては、土木技術者も交通計画という知識を身につけておく必要が起ってくるであろう。

本書は交通計画に関心を持つ大学生や、実務に励む若い人達を対象として書かれた教科書であって、著者らは読者が交通計画の基礎理論を十分に理解することを目的として書かれている。そして、内容の理解をあわせて読者の創造力を引き出すこともねらいとして書かれた本である。

本書は三部作に分かれている。すなわち、第 1 部の交通においては物の考え方に重点をおき、第 2 部の交通の計量側面からの思考では、十分に開拓のされていない未知の分野を少しでも手がかりを求めることができるように留意を払い、第 3 部の交通計画の実際においては、広域的な視野から交通計画を考えようとし、あわせて屋内交通施設についても言及している。そして、これらの叙述が「国際的交通体系」という観点からも述べられていることは、早晩日本が国際的影響の中にとび込んでいく現代にあって、一つの交通計画のざん新的な方向を与えているとみることができよう。

本書が教科書であるため、各章の終りには演習問題が付され、おもなものについて解答が出されている。

現在日本の都市がかかえている問題点へのアプローチともなるものであるが、読者は都市交通の中でも重要な地位を占める業務交通問題やパーソントリップ調査、駅前広場等がかかえている問題点なども、あわせて考えながら読むことをおすすめする。 [ほ]

技報堂刊, A5 判・404 ページ, 定価 1 800 円,  
昭和 46 年 7 月 29 日受付

マッケイ著・波田江; 訳

ジオテクニクス・地域計画の哲学

本書は、著者の長年にわたる地域計画の仕事の結果かかれたもので訳本である。「ジオテクニクス」とは耳なれない言葉であるが、訳者の注釈によれば、「人間にとって地球を最も住みやすくする応用科学」とであるとされているが、原題は「新しい探検」「地域計画の哲学」となっている。

本書は固有の環境を都市化から守り保護することを目的として、1928 年に書かれたものであるが、思考が高度であったために、当時はまったくといってよいほど省りみられなかった本である。しかし、本書で述べられている哲学は、今日のように時代が進むと、この本で指摘されてきた問題点が明瞭化し、都市問題にたずさわっているもの、土木や建築の仕事に従事しているものにとっては、放っておけないものとなってきている。そこで、1962 年に本書は再版されたのであるが、このことがまさしく問題認識の正当性を物語っているとみることができよう。

しかし、本文は難解なところもあるとはいえ、読者は現在の読者をとりまくさまざまな事象や現代の問題と結びつけて読むと、著者の訴えようとしている心情がよく伝わってくるようである。「自然と文化の資源や景観をみにくくしたり、大気を汚したり、高度な生活のための動植物の複雑な結びつきを分裂しないで用いる問題の対話」であると著者の序では述べられている。

「文明の中の荒野」「固有地域とメトロポリタン」「ワールドエンパイア」「生活することと存在すること」「天然資源としての環境」「計画と発見」「地域的都市とメトロポリス」「メトロポリタンの侵入をコントロールする方法」「固有環境を開発すること」「文化対機能化」などがおもな目次である。

各章の始めには、昔の人がいった含蓄のある言葉が引用されている。たとえば、「文明化しすぎた生活をしている人々は、山へゆくということは家へゆくことなのだということに気付きはじめている」などという表現は、まさしく、かえがえのない地球に住む、われわれ人類にとって深く考えさせられるものがある。

むづかしい本であるが、よく読んでみると面白い本である。 [ほ]

彰国社刊, A5 判・224 ページ, 定価 1 300 円,  
昭和 47 年 6 月受付